

芥川龍之介「羅生門」と「鼻」の中国語訳について

—魯迅訳と1970年代以降の翻訳成果の懸隔—

王 唯 斯

A Translation Study about “Rashomon” and “The Nose” :

Differences between Lu Xun's Translations and Post-70's
Chinese Translations

Wang Weisi

芥川龍之介は深受中国人关注的一位日本近代作家。对其作品的译介工作从1921年魯迅首译以来，至今绵延近百年。目前仅《罗生门》与《鼻子》的中译本就多达数十种。但面对如此庞大的译介数量，中国国内目前尚无一本关于芥川文学中文译介的研究专著，为数不少的翻译研究论文仍局限于比较译文的优劣。在如此的比较之下，魯迅的翻译处理往往被认为相对拙劣。但翻译活动无法脱离社会与历史背景。主张“通过翻译改造中文”的魯迅在翻译策略方面与现代译者有着明显不同。

本稿将基于韦努蒂提出的“归化”与“异化”翻译策略，围绕《罗生门》与《鼻子》两部作品中的一些具体译例，以“文化负载词”，“长定语句”，“断句方式”等3项分析基准考察魯迅与现代译者之间在翻译策略上的不同之处。

关键词：芥川龍之介，韦努蒂，翻译策略，归化，异化，魯迅

1. はじめに

近代日本文学史上の傑作と呼べる作品を数多く残した芥川龍之介は、中国で最も注目を集める日本の近代作家の一人である。1921年に魯迅によって訳された「鼻」と「羅生門」を中訳の嚆矢として、現代までのおよそ百年近くの間、新訳が後を絶たず出版されており、人気は未だに衰えを見せていない。一例をあげると、2005年に山東文芸出版社による『芥川龍之介全集』（全五巻）が刊行された。その全集には小説や随筆だけでなく、書評・書簡・遺書・年譜までも添え、各巻平均800ページの本格的全集である。それは外国人作家、特に日本人作家として稀なことといえよう。中国では、夏目漱石や太宰治らもよく読まれるというものの、全集は2018年の現在まで出ていない。そこから芥川文学の注目度を垣間見ることができる。

上述から明らかのように、中国における外国文学作品としては、芥川の作品の人気は極めて高い。ために芥川の作品の中国語訳は、実に驚くほど豊富な数がある。筆者の調査によれば、1923年から2018年までに出版された芥川龍之介の代表格である「羅生門」と「鼻」の中訳が収録される書籍は、それぞれ32種類と27種類¹に達している。

しかし、膨大な翻訳が存在する一方で、中国における芥川研究の学術専門書は一冊しかない²。また芥川文学の中国語訳の研究に関する学術書も、いまだ一冊も出版されていない。個別論文の面から見れば、芥川文学の中国語訳を取り上げるものは少なくないと言えるが、その多くは作者の主観を拠る所に、どこが良い訳出であり、どこが不適切な訳出であるか、もしくは原文に忠実であるか否かを指摘するのが中心であって、翻訳学としてアプローチする研究ではない。中国においては芥川文学の

1 本稿85-86頁付表参照。

2 その唯一の研究書が、邱雅芬著『芥川龍之介学術史研究』（訳林出版社、2014年）である。

中国語訳に関する研究に限らないが、翻訳学を理論的基盤とした研究は、まだ不十分であると言えよう。そこで本稿では、「鼻」と「羅生門」に関する訳文を二つの時期に区分した上で、それぞれの時期による翻訳内容の変化を整理し、加えてこの変化が生じた理由についても述べてみたい。

2. 翻訳ストラテジーについての対概念

前述のように、これまでの中国における芥川作品の翻訳研究は、比較して優劣をつけるようなものが多く、翻訳学的見地からの理論的研究はまだ不十分であった。翻訳を学問対象とする翻訳研究には、様々なアプローチの方法があるが、本稿ではアメリカの現代翻訳学研究者ヴェヌーティ (Venuti) による「同化 (domestication)」と「異化 (foreignization)」³ という二つの翻訳ストラテジー (translation strategies) の理論を援用する。ヴェヌーティの理論は、翻訳行為と文化や社会、イデオロギーなどを関連させて研究するときの一つの分析方法として有効なものだろう。

翻訳行為は古くから行われてきた。そもその発生は、神の言葉である『聖書』をいかにしてフランス語やイタリア語等の「土着語」に写し伝えるかであったし、その後は2つの共同体の接触において、通常、相手から何かを学びたい、何かを取り入れたいと強く望むことによって生まれた。こうした学びたいもの、取り入れたいものをどのように翻訳するかについて、古くから翻訳者による様々な説がある。その中で、翻訳者が必ず直面するジレンマがある。すなわち、「原文志向」か、「訳文志向」かの選択である。それをめぐる様々な選択や翻訳手法は、翻訳ストラテジーと呼ばれる。

³ ヴェヌーティの著作である『The Translation's Invisibility: A History of Translation』(Routledge, 1995年) に詳しく述べられる。

20世紀後半まで、翻訳理論は「直訳」、「意識」、「自由訳」の三種類が存在し、その有効性はそれぞれ一長一短であり、決定的な翻訳理論の構築には至らなかった⁴。しかし、1990年以降、これらの翻訳ストラテジーについて、ヴェヌーティが2つの志向に大別して提示した。それが前述した同化的翻訳ストラテジーと異化的翻訳ストラテジーである。具体的に言えば、「同化」という翻訳ストラテジーを採った場合、翻訳者は翻訳された当該言語（これを目標言語という）における読みやすさ、親しみやすさを最も重要なものだと考える。換言すれば、読者が翻訳されたものだと気づかずに、「最初から翻訳後の言語で書かれた」ような「すらすら読める」ものを目指すのである。また極端な同化的翻訳ストラテジーとしては、翻案（Adaptation）⁵という手法がある。例えば、明治期の翻案劇で「ハムレット」が「葉村丸年」⁶と訳され、清末民初の「不如帰」の翻案劇では、「桜」が「菊」⁷と訳され、「名探偵コナン」の米国版においては「毛利小五郎」の名前が「Richard Moore」⁸と訳される等の方策である。いずれも翻訳を超えてより一層目標言語の文脈に「同化」させたものであり、原文の単語を活かすのではなく、あくまで目標言語を読む人のスムーズな理解が、重要視される。

一方、「異化」という翻訳ストラテジーでは、翻訳者は翻訳される原文（これを起点言語という）を重視して目標言語の規範から外れる訳出

4 Jeremy Munday. 『Introducing Translation Studies』 (4ed) (Routledge, 2016年) 30頁。原文英語。筆者日本語訳。原文は以下である。「Up until the second half of the twentieth century, western translation theory seemed locked in what George Steiner (1998: 31 9) calls a 'sterile' debate over the triadic model of 'literalism', 'paraphrase' and 'free imitation'。」

5 翻案とは「既存の事柄の趣旨を生かして作りかえること。特に小説・戯曲などで、原作の筋や内容をもとに改作すること。また、そのもの」。デジタル大辞泉による。

6 藤濤文子著『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相』（松籟社、2007年）47頁。

7 白井啓介「二つの不如帰—翻訳と翻案の間」『日本語文化研究第十一輯・北京大学と文教大学25周年友好交流記念専刊』（学苑出版社、2017年）234頁。

8 藤濤文子前掲書 61頁。

をし、目標言語の読者になじみのない訳文を選ぶ。その場合は、表現法や文の構造などにおいて、一読して「外国語から訳した」ような違和感を覚える訳出を採るのである。目標言語や文化に新たな要素をもち込みたい、そうして目標言語やその文化を変化させたいと考える場合に、この翻訳ストラテジーがよく使われる。

中国では現在、文学作品の翻訳においては中国人読者の受容性を高めることを重視した脱翻訳調のテキストが求められるのが一般的である。したがって、大多数の翻訳者が、読者が外国語の「異質性」を感じさせることを避け、起点言語の内容（表現は問わず）を楽しんでもらえるような読みやすい訳文にするという傾向が強く見られる。

3. 魯迅の翻訳観について

3.1 初期の翻訳＝同化的・翻案的な方略

魯迅は「開啓民智」（大衆を啓蒙する）ための不可欠の条件として、外国の文化、思想を重視した。彼の全作品の中でおよそ半分の数量を占める翻訳は、その具体的な現れである。外国の文化や思想を忠実に伝えるために、魯迅は「硬訳」⁹や「すらすら読めることよりも、むしろ原文に忠実であること（寧信而不順）」などの翻訳の姿勢を主張した。後には、その「硬訳」をめぐる大きな論争も引き起こした。例えば、1929年、梁実秋は「新月」月刊第3巻第6期、第7期において、魯迅の訳文を「死訳」であると批判した。梁実秋は「読者にわからせるように原文の文構造を変えてもよい。“わからせる”のは最も大事なことから。“我慢して読む”のは楽しいことではないし、たとえ“硬訳”しても必ず原文のイメージをそのまま維持できるとは限らない」¹⁰と述べ、

⁹ 「硬訳」とは、原文の一字一句も疎かにせず、忠実に訳していくという意味である。

翻訳の姿勢について魯迅と論争を行ったのである。しかし、魯迅の翻訳は最初から一定の思想のもとで作られたものではなく、実際には魯迅の翻訳は「同化的翻訳ストラテジー」から「異化的翻訳ストラテジー」へという変転過程があった。また、その「寧信而不順」の翻訳論の背景には当時の時代的風潮があった。

魯迅の初期の翻訳作品の大多数は、清末の主流である「文言」と「同化的ストラテジー」を踏襲したものだったのだ。清末では、翻訳者と発行業者は、読者の好みに合わせるように、「原作尊重」の精神が全く見られない翻訳ストラテジーを採っていた。下記は、1905年に発行された『電術奇談』¹¹の前書きであり、ここから清末の翻訳方法を垣間見ることができる。

【資料】

「此書原譯僅得六回，且是文言。茲剖為二十四回，改用俗語，冀免翻譯痕跡。原書人名地名，皆係以和文諧西音，經譯者一律改過。凡人名皆改為中國習見之人名字眼，地名皆借用中國地名，俾讀者可省腦力，以免艱於記憶之苦，好在小說重關目，不重名詞也。書中間有議論諧謔等，均為衍義者插入，為原譯所無。衍義者擬借此以助閱者之興味，勿譏為蛇足也。」¹²（下線筆者）

10 壁華編『魯迅與梁實秋論戰文選』（天地圖書有限公司、1979年）67頁。原文中国語。筆者日本語訳。原文は以下である。「我們不妨把句法變換一下，以便使讀者能懂為第一要義，因為“硬著頭皮”不是一件愉快的事情，並且“硬譯”也不見得能保存原來精悍的語氣。」

11 翻訳者は吳沃堯（1866-1910）。前書きには「日本菊池幽芳氏原著」（実際に、英語から訳したものである）、「東莞方慶周訳述」、「我佛山人衍義」、「知新宝主人評点」と書いてある。

12 陳平夏、夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料1897-1916』（北京大学出版社、1997年）163-164頁。

注目すべき箇所は、「冀免翻譯痕跡」¹³、「凡人名皆改為中國習見之人名字眼，地名皆借用中國地名，俾讀者可省腦力，以免艱於記憶之苦」¹⁴、「書中間有議論諧謔等，均為衍義者插入，為原譯所無。衍義者擬借此以助閱者之興味，勿譏為蛇足也」¹⁵とある部分である。つまり、この前書きから明らかなように、当時の翻訳者の関心は、「外国文化」や「外国文学」などの紹介、摂取ではなく、読者に小説のストーリーだけを楽しんでもらうことにあったと言えるのである。

魯迅は翻訳を「開啓民智」ための不可欠の条件と考えていたが、上記のような社会の風潮もあって、初期の翻訳にあつては、同化的で翻案的な翻訳ストラテジーを採っていた。1903年に刊行された魯迅訳の『月界旅行』は、その典型的な例である。魯迅は各章の冒頭に、その回の内容を示す対句の題をつけ、「この後いかがなりますや、まずは次回のお楽しみ」¹⁶という決まり文句で終わる、伝統的な章回小説の方式を採っていた。つまり、魯迅は章回小説という文体の中に嵌め込む形で外国文学を翻訳したと言える。以下、魯迅訳の『月界旅行』の一節を例にとりながら説明したい¹⁷。

¹³ 「翻訳の痕跡をぬぐいさろうとした。」筆者日本語訳。

¹⁴ 「本書ではすべての人名はみな中国で見慣れた人名にあらため、地名もみな中国のものを借用した。これによって読者の脳への負荷を低くし、それによって難しい単語の記憶から解放とう。」筆者日本語訳。

¹⁵ 「作中にあらわれる議論やユーモアなどは、すべて翻訳時に挿入したものであり、原書には存在しないものである。余計に挿入されたものではあるが、それは読者の興味をひくためである。」筆者日本語訳。

¹⁶ 原文は「欲知後事如何，且聽下回分解」、日本語訳は『白水社中国語辞典』（白水社、2002年）による。

¹⁷ 原書はジュール・ヴェルヌの『月世界へ行く』であり、ここの魯迅訳は井上勲（1850-1928）が日本語訳した『月世界旅行』をもとに更に中国語訳したものである。

【資料】

井上勤訳『月世界旅行』（原文） ¹⁸	魯迅訳「月界旅行」 ¹⁹
<p>第一回 砲銃社</p> <p>亜墨利加合衆國獨立戰爭最中ノ時トカヤ。合衆國ノ内「マリールランド」ト云ヘル國ノ首府「バルチモール」ト云ヘル處アリ。此處ニ於テ新タニ最モ人心ヲ感動セシムベキノ一社ヲ結成セリ。抑モ當時ノ如キ、人心洶々擧テ一撃ヲ試ミントシ、或ハ船持ニテ偏ニ生計ヲ運漕ニ托スル者ヨリ、或ハ店商賣ヲ持テ糊口ヲ安シスル者、或ハ機械製造ヲ職トスル者²⁰ニ至ル迄、曾テ世人ノ聞知セル如ク各皆兵事ノミ熱ツク精心ヲ凝シ平生商業ノミ勵ミ。只ニ利益ノ一点ニ意馬ヲ馳セ²¹、今日ノ業トシ彼ノ「ウエスト・ポイント」兵學校ノ如キ如何ナルヤノ。想像タモ及ハサル者ニシテ、或ハ大将トナラン、或ハ小将トナラン、或ハ大佐トナラン²²ト出放題ヲ言出シ、腕ヲ扼シテ、丁禪ニ擬シ各自力商業ヲ忘レ、帳合モセスシテ空ク東西ニ狂奔スルノ有様ナリキ。斯クテハ無謀ノ如クナレトモ、亜墨利加人民ハ奮然欧羅巴ノ舊友ニ敵對シ、彼等ノ常ニ他國に勝チヲ得タルカ如ク²³、兵器彈藥、金銀人命ヲ無量ニ浪費シタルノ力ニ據リ、遂ニ勝利ヲ全フスルニ至レリ。</p> <p>而ノ亜墨利加人民カ勝利ヲ全フセシ根元ヲ尋ヌルニ、只単ニ砲術ノ學精ナルニ依ルノミ。是レハ米國ノ火器ガ十分精巧ニシテ欧州人ノ器械ニ優レタルト云フニモアラス。唯未曾有ノ大砲ヲ發明シ其彈力極メテ長距離ヲ達シ、況ンヤ斜面水平鉛直等ノ射法ニ至テハ²⁴精且妙英佛普等ノ遠ク及ハザル。（後略）</p>	<p>第一回 悲太平會員懷舊、破寥寂社長貽書</p> <p>凡讀過世界地理同歷史的，都曉得有個亞美利加的地方。至於亞美利加獨立戰爭一事，連孩子也曉得是驚天動地，應該時時記得，永遠不忘的。今且不說，單說那獨立戰爭時，合眾國中，有一個麥烈蘭國，其首府名曰拔爾法摩，是個有名街市。真是行人接踵，車馬如雲。這府中有一所會社，壯大是不消說，一見他國旗高挑，隨風飛舞，就令人起一種肅然致敬的光景。原來是時瀕年戰鬥，人心恂恂，經商者捐資財，操舟者棄舟楫，無不竭力盡心考究兵事。那在坡茵兵學校的，更覺熱心如熾。這個說我為大將，那個說我做少將。</p> <p>此外一切，真是視而不見，聽而不聞，食而不知其味的了。</p> <p>尔后，费却许多兵器弹药，金资人命，遂占全胜，脱了奴隶的羁轡，造成一个烈烈轰轰的合众国。</p> <p>諸君若問他得勝原因，卻並無他故：<u>古人道，工欲善其事，必先利其器</u>；美國也不外自造兵器，十分精工，<u>不比不惜重資，卻去買外國廢鐵，當作槍炮的</u>；所以愈造愈精，一日千里，連英、法諸強國極大鋼炮，與他相比，<u>也同僬僥國人遇著龍伯一般</u>，免不得相形見絀了。（後略）</p>

上記の訳文をみると、魯迅の初期の翻訳では、読者の好みに合わせるために、中国語化あるいは中国文学化することを優先し、起点言語＝原文の文構造や文の表現から個々の語彙を生かすことなく適宜変更・省略・加筆するなど、翻案的な処理が行われている。その顕著な特徴として二点が指摘できるだろう。一つ目は、対句表現と「四字格」²⁵が多用されることである。そして二つ目は、「視而不見，聽而不聞，食而不知其味」²⁶、「工欲善其事，必先利其器」²⁷、「僂僂國人遇著龍伯一般」²⁸など起点言語に存在しない中国の典故や成語に基づく句を付け加えていることである。

3.2 翻訳に対する姿勢を変えた魯迅

しかし、その後、すでに翻訳運動が盛んになっていた日本に留学した魯迅は、翻訳方法を大きく変化させた。具体的に言えば、同化的翻訳ストラテジーから異化的翻訳ストラテジーへと、その戦略を転換させたのである。

¹⁸ 井上勤訳『月世界旅行・卷之壹』（二書樓、1880年）1-3頁。

¹⁹ 『魯迅全集・第十一卷』（人民文学出版社、1973年）13-14頁。下線部は翻訳者の加筆、囲み線は原文に存在しない中国の典故や成語に基づく句である。下線と囲み線は筆者による。

²⁰ 「或ハ機械製造ヲ戰トスル者」が翻訳されていない。

²¹ 「只ニ利益ノ一点ニ意馬ヲ馳セ」が翻訳されていない。

²² 「或ハ大佐トナラン」が翻訳されていない。

²³ 「斯克テハ無謀ノ如クナレトモ、亜墨利加人民ハ奮然欧羅巴ノ舊友ニ敵對シ、彼等ノ常ニ他國に勝チヲ得タルカ如ク」が翻訳されていない。

²⁴ 「唯未曾有ノ大砲ヲ發明シ其彈力極メテ長距離ヲ達シ、況ンヤ斜面水平鉛直等ノ射法ニ至テハ」が翻訳されていない。

²⁵ 「四字格」とは、中国人によく使われるレトリックの一つであり、中国語の四字成語、四字熟語そして、臨時的組み合わせた四字形式など、漢字四字から成る言語形式のことを指す。

²⁶ 意味は「あることに心を奪われ、前のことに心を集中できないこと」である。出典は『大学』（伝第七章正心）。

²⁷ 意味は「良い仕事をしようと思ったら、まず道具を良く研ぐものだ」である。出典は『論語』衛靈公第十五。

²⁸ 「僂僂國」は中国の古代伝説中の小人国、「龍伯」は古代伝説中の巨人である。ここでは、「両者は比べものにならないほどの差がある」という意味だが、いずれも井上勤訳にはないものである。

魯迅が異化的翻訳ストラテジーを採ったのは、中国に言文一致を定着させる意図もあった。新文化運動（1917）以前の著書と翻訳書は、「文言」で書かれたものが主流である。しかし、「文言」によって外国の文章を翻訳すると、社会改革や中国語の改造が実現できないと魯迅は考えた。1932年に魯迅は翻訳書の想定読者層、翻訳の目的、そして、自分の「硬訳」について次のように述べている²⁹。

しかし、私たちの翻訳は、それほど単純ではないだろう。まず、大衆の中でもどのような読者を想定するのかを決定する必要がある。大衆を大まかに分類してみると、教育を受けた「甲」レベル、ある程度の識字能力がある「乙」レベル、わずかな識字能力しかない「丙」レベルとなる。（中略）「甲」レベルの読者に提供される翻訳書に関しては、どのような形であれ、私は「すらすら読めることよりも、むしろ原文に忠実であること」という考えを主張している。（中略）なぜ完全に中国化しないのか、なぜわかりやすいものにならないのか。（中略）私の答えは、「これも翻訳書である」というものだ。そのような翻訳書は、新しい内容を輸入するだけでなく、新しい表現法をも輸入するという役割を担っている。中国語の文、言葉などは、文法的にはあまりにも精密ではない。文法が精密ではないというのは、思考の流れが不正確であるということだ。言い換えれば、そこには混乱があるということである。もしも、永遠に混乱した言語を使い続けるならば、たとえ、言葉をすらすら読めても、結局のところ、なにも得られないだろう。この病を治すためには、継続的に苦労を重ね、異様な文法を取り入れるし

²⁹ 「關於翻譯的通信」『魯迅全集』（人民文学出版社、1973年）376-377頁。原文中国語、筆者日本語訳。なお、原文は紙面の都合により略。

かないと考えている。(中略)その後になって初めて、それを自分のものとしてすることができるのだ。これは決して空想的なことではない。例えば、日本を例に挙げると、日本語の文章の中では、欧化された文法がよく見られる。梁啓超の『和文漢読法』³⁰時代のものとはかなり異なっていると言える。最近の例では、1925年に「罷工」(ストライキ)というフレーズが作られている。このような言い回しは、これまで現れたことはなかったものの、大衆は既にそれを理解しているのである。

以上からみれば、魯迅にとって翻訳者の役割は「新しい内容を輸入するだけでなく、新しい表現法をも輸入するという役割も担っている」というものであり、翻訳を通して中国語を改革しようという意図があったことがわかる。そうであれば、魯迅の翻訳観と、現在の受容性を高めることを重視する翻訳観には大きな懸隔があると言って良いだろう。両者の相違はどこにあるのか、これについて、検討する価値があるように思う。

4. 訳例の比較検討

1921年に、魯迅は芥川の代表作である「羅生門」と「鼻」を白話文で翻訳し、二回にわたって北京の新聞「晨报副鐫」に掲載した。およそ百年後の現在では、同じ起点テキストに対して新たな翻訳作品が多く出版されてきたので、以下、「羅生門」と「鼻」を用いて、魯迅訳を1970年代以降の代表的な訳本と比較しながら、魯迅の「硬訳」のあり方、中国

³⁰ 短期間で日本語を習得することができるかと主張する梁啓超は1900年、『和文漢読法』を著した。その具体的な訳例としては、「晚霞丘ハ慕士頓府東北一里外ニ在リ左ハ海湾ヲ控エ右ハ群丘ニ接シ形成巍然」(柴四郎、『佳人之奇遇』による)、梁啓超訳では、「晚霞邱在慕士頓府東北一里外、左控海湾、右接群邱、形式巍然」があげられる。

語改造の意図や現在の翻訳の実態について検討していきたい。

1923年から2018年まで芥川龍之介の代表作である「羅生門」と「鼻」の中国語訳は、すでにそれぞれ32種類と27種類³¹が存在している。しかし、ここで注目したいのは、この翻訳の数だけでなく、翻訳された時期である。「羅生門」の翻訳のうちの31種類と、「鼻」の翻訳のうちの25種類が、新中国成立（1949年）後、とりわけ改革開放（1978年）後のものである。一方、魯迅訳は民国時代においては高い評価を受けていたと推測できる。例えば、邱雅芬（2014）はこう述べている。「魯迅訳の「鼻」と「羅生門」は民国時代の定番となった。これ以降の芥川選集と日本文学集に「鼻」と「羅生門」を収録する際、大抵は魯迅の訳文を採用した。彼の翻訳は広く好評を博した上に、芥川龍之介本人もその翻訳の質を絶賛していた（後略）」³²。

このように民国時代に高く評価を受けていた魯迅訳であったにもかかわらず、1970年代以降は、新たな翻訳が求められ、大量に出版された。では、魯迅の翻訳と、現代の翻訳は、翻訳ストラテジーの観点から見てどのような違いがあるのだろうか。以下にその点について論を展開していこう。

以下に翻訳文の比較検証をする上で、（1）「文化差のある名詞」、（2）「連体修飾語」、（3）「文の配列」という3点を、比較基準の分析項目とする。基準となる分析項目について、英和翻訳の訳例研究ではすでに様々な先行研究によっていくつもの基準が提出されているが、日中翻訳、あるいは中日翻訳の場合は、まだ翻訳を比較分析する上での明確な基

³¹ 本稿85-86頁付表参照。

³² 邱雅芬前掲書P118。原文中国語。筆者日本語訳。原文は以下である。「魯迅翻译的《鼻子》、《罗生门》几乎成为民国时代的定本，芥川选集和日本文学集在收录这两篇作品时，一般都使用鲁迅的译文，可见这两篇文章受了广泛的好评，连芥川本人也高度评价译文质量……（後略）。」

準が集積されていない。しかし、英和翻訳で問題になることが、日中翻訳で重要であるとは限らないため³³、それを完全に利用することはせず、参照するにとどめ、本稿では上記3点を分析項目とした。具体的に以下にそれぞれ2つずつ訳例を挙げて、説明を試みる。

また訳本の選択については、節目となる訳本、あるいは評価の高い訳本を選択した。すなわち、「羅生門」は魯迅（1921）、楼適夷（1980）、林少華（1997）、文潔若（2003）、高慧勤（2006）王軼超（2012）、趙玉皎（2015）であり、年代順によって、それぞれ「TT-1」から「TT-7」と表記する。そして、「鼻」については、魯迅（1921）、林少華（1997）、文潔若（2003）、高慧勤（2006）、王軼超（2012）、趙玉皎（2015）であり、同じく年代順によって、それぞれ「TT-1」から「TT-6」と表記する³⁴。なお、訳例については、すべて<訳例X-X>として示す。なお、各訳例の中の下線や囲み線などは、すべて筆者が付けたものである。

4.1 「文化差のある名詞」について

<訳例 1-1 >

【資料】

(ST) 羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない³⁵。（「羅生門」による）

(TT-1) 這羅生門，既然在朱雀大路上，則這男子之外，總還該有兩三個

³³ 例えば、名詞の単数形、複数形、関係代名詞の訳出について、日中翻訳では重要な問題とはならない。

³⁴ 一部の訳文については、現時点でその翻訳された実際の年代を特定することが困難であるものもある。それらについては、翻訳書の初版の刊行年を採用した。「鼻」についても同じである。なお、楼適夷は「鼻」を翻訳していないので、「鼻」の訳文を6つにした。

³⁵ 「羅生門」と「鼻」の日本語の引用は『芥川龍之介全集〈第1巻〉羅生門 鼻』（岩波書店、1995年）。

避雨の市女笠和揉烏帽子〔注〕的。然而除了這男子，卻再沒有別的誰。
〔注〕市女笠是市上的女人或商女所戴的笠子。烏帽子是男人的冠，若不用硬漆，質地較爲柔軟的，便稱爲揉烏帽子。

(TT-2) 罗生门正在朱雀大路，本该有几个戴女笠和乌软帽的男女行人，到这儿来避雨，可是现在却只有他一个。

(TT-3) 其实这罗生门位于朱雀大路，按理，除他之外，也该有两三个头戴高斗笠或三角软帽的避雨男女。然而唯他一人。

(TT-4) 罗生门既然位于朱雀大路，这个男子而外，按说还会有两三个避雨的戴市女笠或软乌帽子的人，然而，除了他，谁都没有。

(TT-5) 罗生门正对着朱雀大街，避雨的本不该就他一人，似还应有三两戴女笠和软纱帽的行人，可现在确实只有他一人。

(TT-6) 城门正对着朱雀大街，平日总该有两三个头戴斗笠和软纱帽的行人前来避雨，但是现在只有他一人。

(TT-7) 罗生门位于朱雀大街上，按说出了这么仆役，总该有三两个戴着圆竹女笠或是乌布软帽的人来避雨才是，可是此时除了他之外，再没有旁人了。

「羅生門」の舞台は平安時代であるため、その服装、役職、地名などについて、現代の日本人であっても、必要な知識を持っていないと完全に理解できるとは限らない。したがって翻訳する際に、国と時代という二重の懸隔のある語彙を、つまり読者たる中国人になじみのない語を、いったいどのように訳出するのが問題となる。換言すれば、言語と文化、時と地域の壁をどのように乗り越え、中国人の読者に理解させるかが大きな問題となるのである。「羅生門」の冒頭である<訳例1-1>には、「市女笠」や「揉烏帽子」という文化差のある名詞が存在している。この語に対し、翻訳者たちの対処のあり方や内容に、翻訳者たちの採用し

た翻訳ストラテジーが反映されると考えられる。原文の漢字をそのまま導入し注を付けるのか、それとも中国人のなじみのある概念に置き変えるのか、そこに翻訳者のストラテジーが看取されるのである。

そこで上記の訳例を読み比べると、「市女笠」、「揉烏帽子」について、魯迅訳のみが日本語の漢字をそのまま借用し、訳者による注が付けられているが、1970年代以降の訳では、ほとんど注解が付けられていないのがわかる。「高斗笠」（高い笠）や「三角软帽」（三角形の柔らかい帽子）のような異質性を感じさせない訳語を使用する工夫によって、読者が違和感なく理解することを助けている。また、「雨やみをする市女笠や揉烏帽子」という表現は、「市女笠」や「揉烏帽子」が換喩のレトリックであることが明らかである。魯迅は文学的表現手法を取り入れるため、異化的翻訳ストラテジーとして積極的にこの換喩を導入した。それに対して、魯迅以後の翻訳者は、こうした手法を取り入れるより中国語での読みやすさ、理解しやすさを優先するため、同化的翻訳ストラテジーを用いたと言えるだろう。

さらに注目したいのは、魯迅の訳は品詞まで原文に極力合わせようという手法であった点である。原文の「市女笠や揉烏帽子」は換喩として人間を指し示す名詞であるが、これを中国語に訳すとなると、動詞を付け加えないと中国語の文法に合致しない。それを十分承知していたはずの魯迅は名詞として訳出している。一方、1970年代以降の訳は以下のとおりである。楼適夷：「戴」女笠-「戴」乌软帽、林少華：「戴」高斗笠-「戴」三角软帽、文潔若：「戴」市女笠-「戴」乌软帽子、高慧勤：「戴」女笠-「戴」软纱帽、王軼超：「戴」斗笠-「戴」软纱帽、趙玉皎：「戴」圆竹斗笠-「戴」乌布软帽。つまり、1970年代以降の訳では例外なく、この語が換喩としてあり実際にはそれを着用する人間であるという意味を明示するために「戴」を加筆して、動詞目的語構造による名詞化

を図っているのである。

< 訳例 1-2 >

【資料】

(ST) 「己は檢非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居ただのだから、それを己に話しさえすればいいのだ。」(「羅生門」による)

(TT-1) “我並不是檢非違使〔注〕的衙門里的公吏。只是剛才走過這門下面的一個旅人。所以並不要鎖妳去有什麼事。只要在這時候，在這門上，做著什麼的事，說給我就是。”

〔注〕古時的官，司追捕，糾彈，裁判，訟訴等事³⁶。

(TT-2) “我不是巡捕厅的差人，是经过这门下的行路人，不会拿绳子捆你的。只消告诉我，你为什么在这个时候在门楼上，到底干什么？”

(TT-3) “我不是按察使的衙役，是打门下过路的人，不会把你捆上绳子送去发落的。只是想知道这种时候你在这门上干什么，你说出来就算了事。”

(TT-4) “我不是什么典史〔注〕衙门里的官吏，而是刚刚从这门楼下经过的旅人。所以不会有把你捆起来发落之类的事。你只要告诉我这般时辰在门楼上干什么来着就行。”

〔注〕原文作“檢非違使”，日本平安时代的官名，掌管治安和司法等工作。译文借用我国古代掌管缉捕、监狱的属官名称³⁷。

(TT-5) 我不是捕厅差役，只是刚巧路过这里。别怕，不会捉你到官里去

³⁶ TT-1に魯迅訳が付けた訳者注である。意味は「檢非違使とは、古代の役人。犯罪者の逮捕、追究、裁判、起訴を司る」である。

³⁷ TT-4文潔若訳が付けた訳者注である。意味は「原文は“檢非違使”であり、日本の平安時代の官職名であるが、訳文では、古代中国の相当する官職名をかりて、“典史”と訳した」である。

的。只消告诉我，这么晚了，你在这门上干什么。

(TT-6) 俺不是什么官府差人，只是过路的，所以不会绑你见官。只要告诉我你在你城门上干什么就行了。

(TT-7) 我并不是巡查衙门的捕史，只是路过此地的行人，所以不会把你绑起来怎么样。不过你要如实说，这个时分，你在城门上作甚。

この箇所では、下線部の「検非違使」をめぐって大きな相違が見られる。「羅生門」のストーリーを見る上では、「検非違使」という平安時代の役職はこの箇所にはか出てこないため、その後の展開に関係のないものと言えらる。その語に対し、魯迅訳では「検非違使」の漢字をそのまま借用した上、「古代の役人。犯罪者の逮捕、追究、裁判、起訴を司る」という注釈を付けている。一方、1970年代以降の中国語訳では、いずれも「検非違使」という語を用いず、読者の便宜のため単語を「中国化」している。それは、中国の人々に知られていない事物をそのまま借用する必要性もメリットもないと考えたためだろう。ここに、1970年代以降の翻訳の方針が垣間見えよう。

中日間の文化的差異を埋め、読みやすくするために、1970年代以降の中国語訳のほとんどは、ある程度原文の時代性を無視して翻訳しているように思われる。上で見た例で言えば、検非違使を「巡捕」に訳した例や、あるいはそれに近い翻訳「捕厅、巡查衙门」にした例がある。確かに「巡捕」は、古代の「警察」のような存在として中国の読者にとって最もなじみのある職名かもしれない。しかし、清朝の官職を指すか、それとも近代に入ってから中国各地に存在した租界の警察を指すものであって、「羅生門」の原文の舞台である日本の平安時代と比べて、言葉の背後にある時代性にはやや懸隔があると言えよう。また、TT-6では、「官府」というような原文の具体的な時代性を消し去り、一般化し

て訳出する場合も確認される。「検非違使」あるいは「検非違使の庁」を「巡捕、巡查衙門」や「官府」に訳出するやり方は、翻訳の忠実性を犠牲にして、中国の人々の身近な概念に置き換える同化的翻訳ストラテジーに基づく翻訳であると言って良いだろう。以下に掲げる表は文化差のある名詞に対する訳出方法のまとめである。

(表)「羅生門」の中の文化差のある名詞の中国語訳

訳者	市女笠	揉烏帽子	検非違使	太刀帯の陣
魯迅	借用+注釈	借用+注釈	借用+注釈	借用+注釈
楼適夷	女笠	乌软帽	巡捕庁	兵营
文潔若	市女笠	乌软帽子	典史+注釈	直訳+注釈
林少華	高斗笠	三角软帽	按察使	禁军营地
王軼超	斗笠	软纱帽	官府	东宫护卫营
趙玉皎	圓竹女笠	乌布软帽	巡查衙門	禁卫军营地
高慧勤	女笠	软纱帽	捕庁	兵营

表からわかるように、文化差のある名詞に対し、TT-1の魯迅訳ではいずれも「借用+注釈」という異化的翻訳ストラテジーを採用し、それによって原文のイメージや時代性を忠実に維持している。それは、魯迅の初期の翻訳と比較して、かなり大きな変化と認められるだろう。その一方、1970年代以降の中国語訳では、ストーリーの展開に関係のない異質な部分を、なるべく中国人の既知の語彙に訳出し、「読みやすい訳文」を読者に提供することを優先する傾向が見られる。すなわち、魯迅訳では注釈が必要だと判断されるような箇所にも、1970年代以降の翻訳者はいずれも注釈を用いず、「読みやすい」言葉を選ぶことを良しとしたと言える。

魯迅は、起点言語固有の要素を中国語に持ち込むことが翻訳者の行う

べきことだと主張していた。上記の2例から、翻訳と注を通して、中国人の読者に日本の歴史や文化を積極的に紹介することを目指した魯迅の意図を読み取ることができる。このような翻訳は、外国文化に関心を持つ読者にとって歓迎されるだろうが、単に小説を読みたいだけの読者にとっては、イメージするのが容易ではない場面が多くて、読みやすさの障害になる可能性がある。このため後世の大多数の翻訳者は、魯迅の訳出手法を受け入れなかったのだと言えるだろう。

翻訳においてこうした文化的差異を埋めるには、起点言語世界の事象をなるべくそのままの形式で伝えた上で、別途「訳者注」などの説明を加える方法と、同化的な訳出処理など様々な翻訳手法を駆使しながら文化的差異を解消し、読みやすさを優先する方法があるのである。本稿の行った訳文対照から指摘できることは、1970年代以降では後者の翻訳方法が圧倒的に多いが、しかしそれも絶対的なものではなく、傾向でしかないということを、理解しておくべきだという点である。

4.2 連体修飾語について

<訳例 2-1 >

【資料】

(ST) 下人はとうとう、老婆の腕を掴んで、無理にそこへ、ねじ倒した。

丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。(「羅生門」による)

(TT-1) 家將終於抓住了老嫗的臂膊，硬將伊撻倒了。是只剩著皮骨，宛然雞腳一般的臂膊。

(TT-2) 家將終了揪住老婆子的胳膊，把她按倒在地，那胳膊瘦嶙嶙地皮包骨头，同鸡脚骨一样。

(TT-3) 仆入终于抓起老太婆的手腕，用力将她扳倒。那手腕瘦得皮包骨，同鸡爪无异。

(TT-4) 仆役终于抓住老奴的胳膊，硬是把她按倒在地。那胳膊活像鸡脚，简直是皮包骨。

(TT-5) 家丁抓住老婆子的手腕，将她扭到在地，那手腕简直如同鸡爪，瘦骨嶙峋。

(TT-6) 家将抓住她像鸡爪子一样瘦骨嶙峋的手臂，将她按倒在地。

(TT-7) 仆役拧着老妇的手腕，蛮横地把她按倒在地。老妇的手腕像鸡爪一样瘦骨嶙峋。

< 訳例 2-2 >

【資料】

(ST) 内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子で脂をとるのを眺めていた。
〔「鼻」による〕

(TT-1) 内供装了一副受著不相信的醫生的手術時候的病人一般的臉，勉勉強強的看弟子和尚從鼻子的毛孔里，用鑷子鉗出脂肪來。

(TT-2) 那神态活像接受技术可疑的医生做手术的患者，老大不高兴地注视弟子用镊子从鼻体毛细孔中剔除脂粉颗粒。

(TT-3) 内供那神情活像是一个由自己所不信任的医生来开刀的病人似的，迟迟疑疑地瞥着徒弟用镊子从鼻子的毛孔里钳出脂肪来。

(TT-4) 那神情就像让一个信不过的医生来做手术，不情愿地瞧着徒弟用镊子从鼻官的汗毛孔里镊出脂肪来。

(TT-5) 内供的表情犹如被不信任的医者动手术般，满腹狐疑地盯着弟子用镊子从鼻子的毛孔里取出脂肪。

(TT-6) 内供像一个被自己不信任的大夫动手术的病人，不情不愿地看着弟子拿着镊子从鼻子里的毛孔里拔出脂肪粒³⁸。

中国語は文法上長い連体修飾語を好まない。それゆえに、多くの中国の翻訳教科書では、文を区切って翻訳したほうがよいと記されている。例えば、『全国翻訳資格（水平）考試指定教材・三級翻訳実務』の「第1課、日中翻訳に関する基本原則」³⁹では、下記のような訳例と解説がある。

【資料】

頭からすっぽりと頭巾のついた黒っぽい外套を着て、雪まみれになって口から白い氣息をむらむらと吐き出す その姿は、實際人間という感じを起こさせない程だった。

他披着—件黑斗篷，蒙着头巾，满身积雪，嘴里呼哧呼哧地吐着白气，几乎使人觉得他不像个人。

解説には「連体修飾語を解体してから、被修飾語を前に移動するのが一般的である。」⁴⁰と書いてある。

長い連体修飾語に関する事例である上記の〈訳例2-1〉と〈訳例2-2〉を見てみると、魯迅の訳出が起点テキストである日本語の語順に合わせた「硬訳」の典型的な例であることが明らかである。この連体修飾語について、魯迅の初期の翻訳と新文化運動以降の翻訳には大きな違いがあると思われる。魯迅の初期の翻訳作品では、中国語表現の規範に従い、長い連体修飾語をできる限り避けようとする傾向が見られるが、新文化運動以降の翻訳は、外国語の表現を取り入れ、新たな中国語の表現方式を作るため、外国語の文を区切らない訳出がなされている。そのた

³⁸ TT-6の趙玉皎訳では、「顔」を直接訳出せず、同化的な手法を用いている。

³⁹ 『全国翻訳資格（水平）考試指定教材・三級翻訳実務』（外文出版社、2005年）譚晶華主編。

⁴⁰ 前掲書2頁。原文中国語。筆者日本語訳。原文は以下である。「原文的被修飾語被译到修饰語之后，原修饰語的顺序在译文中也进行了调整。」

め、魯迅訳の「羅生門」と「鼻」では、中国語の表現の慣例に反した長い連体修飾語がしばしば見られる。

一方、1970年代以降の中国語訳では、中国語の表現方式に反することを避けるため、日本語の長い連体修飾語を区切り、語順を調整したものが多。1970年代以降の翻訳者の多くは、長い連体修飾語を避け、同化的翻訳ストラテジーを採っているのである。結果として、この時期の翻訳には、読者に内容が楽しんでもらえる、読みやすく、わかりやすい訳文にするという傾向が見られる。

4.3 文の配列について

<訳例 3-1 >

【資料】

(ST) 成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。(「羅生門」による)

(TT-1) “自然的，拔死人的頭髮，真不知道是怎樣的惡事呵。只是，在這里的這些死人，都是，便給這麼辦，也是活該的人們。”

(TT-2) “拔死人头发，是不对，不过这儿这些死人，活着时也都是干这类营生的。”

(TT-3) “不错，拔死人头发这事不知有多么糟糕。可话又说回来，这些死人个个都是罪有应得的。”

(TT-4) “可不是呢，薅死人头发这档子事儿，也许是缺德带冒烟儿的勾当。可是，撻在这儿的死人，一个个都欠这么对待。”

(TT-5) “当然，拔死人的头发是不对，可这些死人在世的时候也没少干这档事。”

(TT-6) “要说呢，拔死人头发是不对，不过这些人生前也是干这些勾当

的。”

(TT-7) “拔死人的头发或许是坏事，不过这里的死人都不是什么好人，对他们干这种事并不过分。”

<訳例 3-2 >

【資料】

(ST) 現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往いんだわ。
(「羅生門」による)

(TT-1) 现在，我刚才，拔着那头发的女人，是将蛇切成四寸长，晒干了，说是干鱼，到带刀的营里去出卖的。

(TT-2) 这位我拔了她头发的女人，活着时就是把蛇肉切成一段段，晒干了当干鱼到兵营去卖的。

(TT-3) 我现在拔头发的这女人，就曾把蛇一段段切成四寸来长晒干了，说是鱼干拿到禁军营地去卖。

(TT-4) 现在我刚把头发薙掉的女人嘛，把蛇切成四寸来长，晒干了，说是干鱼，拿到带刀的警卫坊去卖。

(TT-5) 这个女人，我现在拔她的头发，她生前就把蛇肉切成一段段，晒干后拿到兵营当鱼干卖。

(TT-6) 就说我正拔的这位吧，她活着时就是把蛇剁成一段段，晒干了当成鱼干卖到东宫护卫营里去的。

(TT-7) 就说我刚才把头发的那个女人，她把蛇切成四寸一段晒干了。拿到禁卫军营地当干鱼卖。

ここでは、訳例の全体的な文の配列について検討するために、あえて下線は引かなかった。訳例を通読してすぐわかるのは、魯迅訳ではなる

べく原文の語順や区切りに合わせたような訳出を採用しているのに対し、1970年代以降の翻訳では、いずれも魯迅のような訳出法を採らず中国語的な調整が行われていることである。原文の語順や区切りをそのまま訳出するのは、往々にして下手な訳だと考えられてしまう。1970年代以降の翻訳にはこのような観点が影響しているのだろう。例えば、前掲『全国翻訳資格（水平）考試指定教材』では文学作品の翻訳について「ごく少数の例は別として、外国語の文構造と意味を両方とも重点を置くと、必ず原文の語順や区切りに束縛される。文構造という上辺だけのものにとどまらず、原文の真の意味を理解して、自由自在に中国語をもって再創作すべき」⁴¹と述べ、その具体例としては、「春の大連は花に埋もれる美しい街である」を「春的大连淹没在花海之中，是一种美丽的城市」あるいは、「春的大连是一座掩映在万花丛中的美丽城市」などと訳してしまうと原文に拘束された良くない中訳と見なされる。完全に中国語化するならば、「春的大连，繁花如海，真美极了」に訳すべきだと解説している⁴²。

さらに魯迅の翻訳手法自体についても、彼の初期の翻訳と芥川文学を翻訳した時の訳出には大きな違いが見られる。魯迅の翻訳手法は、近代の日本の翻訳者からの影響があった可能性があると思われる。例えば、二葉亭四迷は1906年に「余が翻譯の標準」において、「外国文を翻譯する場合に、意味ばかりを考へて、これに重きを置くと原文をこはす虞がある。須らく原文の音調を呑み込んで、それを移すやうにせねばならぬと、かう自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、譯文にも亦ピリオドが

41 前掲書11頁。原文は以下である。筆者日本語訳「想要做到“神似”，就必须在捕捉到“神”之后，摆脱原文表层结构的束缚，自由地用汉语进行再创作。」

42 前掲書11-12頁。

一つ、コンマが三つといふ風にして、原文の調子を移さうとした。」⁴³と主張している。ここで注目したいのは、二葉亭四迷がこの翻訳の主張を示した1906年は、魯迅の日本留学時代と重なっていたということである。このような主張は現在、原文に拘束されるものとして、あまり受け入れられないものだろう。ここにも、魯迅の翻訳と1970年代以降の翻訳の違いが生じた理由の淵源の一つがあるのではないだろうか。

5. まとめと今後の課題

以上、ヴェヌーティの翻訳論に依拠しつつ、「羅生門」と「鼻」をめぐって、魯迅訳と1970年代以降の翻訳作品の中からいくつかの具体例を取り上げ、比較検討した。そこには翻訳ストラテジー上の大きな懸隔が存在し、その懸隔が生じた理由についても分析を試みた。概括的に言えば、民国時代に好評を博した魯迅の訳は「異化度」の高い翻訳であり、中国語の規範に反した部分が多い。一方、1970年代以降の翻訳は、いずれも読者に読みやすくするための同化的翻訳ストラテジーを採っている。魯迅を含む五四運動時期の知識人たちは、その当時、中国の立ち遅れの原因が中国文化にあると考えていたので、その中国文化を盛る中国語を改造、改良すべき対象とみなしていた。さらに中国語をローマ字化する発想と実践も行っていた。そのために魯迅のような翻訳ストラテジーが採用されたのである。

しかし、中国の民族的復興や自負心が強くなるにつれて、翻訳者にも同化的な翻訳ストラテジーを採用する傾向が強く見られるようになった。極言すれば近年の新訳のほとんどが同化的翻訳ストラテジーを採っているとと言っても良い。ここには翻訳する人を取り巻く社会的、歴史的な背

⁴³ 「余が翻譯の標準」、『二葉亭四迷全集』（筑摩書房、1985年）167頁。

景があるのであって、それを考慮せずに両者を比較して優劣をあげつらうような翻訳論は、翻訳観や翻訳方法を取り巻く歴史や現状と乖離していると言わざるを得ないだろう。

今後の研究としては、主に異化的翻訳ストラテジーと同化的翻訳ストラテジーなどの翻訳ストラテジーの差異に注目しながら、「羅生門」、「鼻」を含め、芥川の代表作がこの百年間にどのような形式で中国語訳されてきたかの歴史的推移を精査する形で、日中翻訳論を更に深く展開していきたい。

付表

筆者の調査による1923年から2018年までに出版された、「羅生門」と「鼻」が収録されている中国語訳の一覧表⁴⁴

番号	訳者	書名	出版社	発行年	備考
1	鲁迅、周作人	《現代日本小説集》 《现代日本小说集》	商務印書館 新星出版社	1923 2006	
2	钱稻孙	《罗生门》	中国电影出版社	1979	『鼻』 なし
3	楼适夷	《芥川龙之介小说十一篇》 《罗生门》	湖南人民出版 华东师范大学出版社	1980 2013	
4	吕远明	《芥川龙之介小说选》	人民文学出版社	1981	
5	林少华	《罗生门》 《罗生门》 《罗生门》 《罗生门（日汉对照）》	漓江出版社 上海译文出版社 青岛出版社 中国宇航出版社	1997 2008 2009 2013	
6	聂双武	《芥川龙之介短篇小说选》	湖南文艺出版社	1998	
7	文洁若	《罗生门》 《罗生门：芥川龙之介小说集》 《罗生门》 《罗生门》	华夏出版社 上海三联书店 现代出版社 四川文艺出版社	2003 2011 2016 2018	
8	魏大海等	《芥川龙之介全集》	山东文艺出版社	2005	
9	高慧勤	《罗生门》 《芥川龙之介精选集》 《罗生门》 《罗生门》 《芥川龙之介短篇小说选》 《罗生门》 《蜘蛛之丝》 《芥川龙之介》 《罗生门》 《罗生门》 《罗生门》	北京燕山出版社 北京燕山出版社 中央编译出版社 江苏教育出版社 漓江出版社 长江文艺出版社 青岛出版社 人民文学出版社 中国画报出版社 北京燕山出版社 时代文艺出版社	2006 2008 2010 2011 2012 2013 2013 2014 2014 2017 2017	
10	聂中华等	《芥川龙之介》	四川大学出版社	2007	
11	傅羽弘	《罗生门》 《芥川龙之介作品精选集》	吉林大学出版社 时代文艺出版社	2008 2018	

⁴⁴ 原著に従い、中華人民共和国時代の書籍の中国語表記を「簡体字」、中華民国時代や台湾の書籍の中国語表記を「繁体字」とする。なお、翻訳の数え方については、翻訳者が同一人物であれば1種類と数えることとする。

12	高洁	《芥川龙之介作品选》	上海外语教育出版社	2010	『鼻』なし
13	濮云	《罗生门》	万卷出版公司	2010	
14	秦刚	《芥川龙之介读本》	人民文学出版社	2011	
15	吴树文	《芥川龙之介编年别裁集》	上海文艺出版社	2011	
16	王轶超	《罗生门》 《罗生门》	吉林出版集团 北京联合出版公司	2012 2015	
17	陌上花	《罗生门》	立信会计出版社	2012	
18	赵俊洋	《罗生门》	安徽教育出版社	2012	
19	蔡鸣雁	《芥川龙之介短篇小说集》	大连理工大学出版社	2014	
20	黄悦生	《罗生门》	江苏凤凰文艺出版社	2015	『鼻』なし
21	赵玉皎	《罗生门-芥川龙之介短篇小说选》 《罗生门-芥川龙之介》 《罗生门》	云南人民出版社 江西人民出版社 江西人民出版社	2015 2017 2018	
22	段树军	《诸神的微笑》	九州出版社	2016	『鼻』なし
23	李燕芬	《罗生门》	万卷出版公司	2016	
24	侯咏馨	《文學鬼才芥川龍之介悟覺人性：從〈老年〉到〈河童〉》 《蜘蛛之丝》	紅通通文化出版社 中信出版集团	2016 2017	台湾
25	朱娅姣	《罗生门》 《芥川龙之介小说精选》	中国友谊出版公司 中国友谊出版公司	2016 2018	
26	黄梅	《罗生门·芥川龙之介短篇作品》	吉林大学出版社	2017	
27	葛青	《罗生门》 《罗生门》	民主与建设出版社 湖南文艺出版社	2017 2018	
28	林皎碧	《罗生门》	江苏凤凰文艺出版社	2017	『鼻』なし
29	希年	《罗生门》	北方文艺出版社	2017	
30	赵峥	《罗生门》	百花洲文艺出版社	2018	
31	伟祺	《罗生门》	北京工艺美术出版社	2018	
32	邱若山	《芥川龍之介短篇選粹》	木馬文化事業股份有限公司	2018	台湾

参考文献

1. 日本語文献

- ①井上勤訳『月世界旅行・卷之壹』（二書樓、1880年）
- ②二葉亭四迷著『二葉亭四迷全集』（筑摩書房、1985年）
- ③芥川龍之介著『芥川龍之介全集〈第1巻〉羅生門 鼻』（岩波書店、1995年）
- ④原卓也、西永良成編集『外国文学と日本の近代・翻訳百年』（大修館書店、2000年）
- ⑤関口安義著『世界文学としての芥川龍之介』（新日本出版社、2007年）
- ⑥藤濤文子著『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相』（松籟社、2007年）
- ⑦ジェレミー・マンディ著、鳥飼玖美子監訳『翻訳学入門』（みすず書房、2009年）
- ⑧齊藤美野著『近代日本の翻訳文化と日本語』（ミネルヴァ書房、2012年）
- ⑨鳥飼玖美子編著『よくわかる通訳翻訳学』（ミネルヴァ書房、2013年）
- ⑩藤井省三著『魯迅と日本文学』（東京大学出版会、2015年）
- ⑪白井啓介「二つの不如帰—翻訳と翻案の間」『日本言語文化研究第十一輯・北京大学と文教大学25周年友好交流記念専刊』（学苑出版社、2017年）
- ⑫藤井省三著『魯迅・東アジアを生きる文学』（岩波新書、2011年）

2. 英語文献

Jeremy Munday. *Introducing Translation Studies* (4ed) (Routledge, 2016年)

3. 中国語文献

- ① 壁華編『魯迅與梁實秋論戰文選』（天地圖書有限公司、1979年）
- ② 陳平原、夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料 1897-1916』（北京大学出版社、1997年）
- ③ 王宏志編『翻譯與創作・中国近代小説論』（北京大学出版社、2000年）
- ④ 譚晶華主編『全国翻譯資格（水平）考試指定教材・三級筆訳実務』（外文出版社、2005年）
- ⑤ 王向遠著『日本文学漢訳史』（寧夏人民出版社、2007年）
- ⑥ 羅新璋編『翻譯論集』（商務印書館、2009年）
- ⑦ 朱一凡著『翻譯與現代漢語的變遷 1905-1936』（外語教学与研究出版社、2011年）
- ⑧ 魯迅著『魯迅全集・第十二卷・訳文』（光明日報出版社、2012年）
- ⑨ 邱雅芬著『芥川龍之介學術史研究』（訳林出版社、2014年）
- ⑩ 魯迅、周作人訳『現代日本小説集』（新星出版社、2006年復刻）
- ⑪ 文潔若訳『羅生門』（國際文化出版公司、2006年）
- ⑫ 林少華訳『羅生門』（上海訳文出版社、2008年）
- ⑬ 王軼超訳『羅生門』（吉林出版集團、2012年）
- ⑭ 楼适夷訳『羅生門』（華東師範大学、2013年復刻）
- ⑮ 趙玉皎訳『羅生門—芥川龍之介短篇小説選』（云南人民出版社、2015年）
- ⑯ 高慧勤訳『羅生門（芥川龍之介小説集）』（時代文芸出版社、2017年）